

令和7年度第3回箕面市支援教育充実検討委員会 議事録

日時：令和8年2月17日（火）午後6時30分から午後8時00分

場所：オンライン開催

出席者：伊丹委員長、野口委員、小田委員、辻野委員、俵積田委員、金城委員、楠橋委員、城内委員、小山委員、末廣委員、ゆうやけの会代表者、つばさの会代表者、新居教員（小学校通級担当者）、文教員（中学校通級担当者）
株式会社 LITALICO 代表者2名

事務局：藪本局長、三島副部長、高取学校教育監、濱口担当副部長、乾人権施策室長、赤城児童生徒指導室長、北川教職員人事室長兼教育センター所長、大上保育幼稚園総務室担当室長、新井学校教育室長
人権施策室：田口室長補佐、脇参事、山北参事

傍聴者：4名

1. 開会

（伊丹委員長）

それでは定刻となりましたので、令和7年度第3回箕面市支援教育充実検討委員会を開催いたします。

本日の司会進行を務めさせていただきます、委員長の伊丹でございます。どうぞよろしくお願いたします。

本年度は、第1回で「支援教育方針の確認」、第2回で「4つの柱の整理」を行ってまいりました。第2回では、「1. 社会モデルの実現」「2. 人権教育の推進」「3. 支援教育の推進」「4. 障害理解」という4つの柱を共有いたしました。本日は、その柱が実際の学校現場でどのように具体化されているかを確認し、次年度につなげる回としたいと存じます。

それでは議事に入ります。「案件1. 箕面市支援教育方針に基づく施策の検証について」でございます。

事務局より説明をお願いいたします。

2. 議事

案件1 箕面市支援教育方針に基づく施策の検証について

（事務局：田口室長補佐）

○資料1（令和7年度箕面市支援教育方針に係るアンケートについて）に基づいて事務局から説明。

（伊丹委員長）

ありがとうございました。

それでは、短い時間ではございますが、検討の柱「箕面市支援教育方針を、どのように実践の中でさらに深めていくか」に絞って、ご意見を頂戴できればと存じます。何かご意見、ご質問はございますでしょうか。

（辻野委員）

豊川南小学校では、今年3月の支援教育研修で伊丹委員長にお越しいただき、ユニバーサルデザインの授業を見て色々とお話いただくことになっております。この取組を、今年度だけでなく継続して実施し、ユニバーサルデザインを学校全体で取り組んでいきたいと思っておりますし、教職員の考えを常にブラッシュアップしていくことに力を入れていきたいと考えています。

（小山委員）

西小学校の支援教育支援員の小山です。

支援教育支援員も、優先順位をつけて児童生徒に対応していますが、支援学級に在籍している児童生徒が各クラスにたくさんいて、対応の優先順位が支援学級、通級の順番通りにはいか

ず、また支援学級在籍の児童生徒にもなかなか対応できない状況があります。今後は、支援を必要とする児童生徒の対応が十分に行き渡るよう、支援教育支援員の人数や学級の状況に応じた配置等を考えていく必要があると感じます。

(楠橋委員)

中小学校の楠橋です。

先ほど、辻野委員からお話がありましたが、研修を継続して行うことは非常に大事だと思います。一方で、日々の忙しさから時間を確保することが難しいという面もあるので、研修で学んだことをしっかりと実践につなげるための時間の確保が課題だと感じています。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

3名の委員よりいただきましたご意見につきましては、次年度の検討につなげていきたいと思っております。

続きまして、案件2に移りたいと思います。株式会社 LITALICO より、今年度の活用状況や成果について、ご説明をお願いいたします。

案件2 LITALICO 教育ソフト 概要と導入効果について

(株式会社 LITALICO 代表者)

○資料2 (LITALICO 教育ソフト 概要と導入効果について) に基づいて説明。

(株式会社 LITALICO 代表者)

株式会社 LITALICO の植田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、LITALICO 教育ソフトの概要と導入効果についてご説明いたします。

弊社は、東京都の中目黒に本社を構えており、「障害のない社会をつくる」をビジョンとして掲げて、障害は人ではなく、社会の側にあるという考え方のもと、障害のある方の一生を支える事業展開を行っております。その事業の1つとして、学校現場へ LITALICO 教育ソフトというサービスの提供をしており、現在約300の基礎自治体様に導入いただいております。

続いて、LITALICO 教育ソフトのサービス内容についてご説明いたします。LITALICO 教育ソフトとは、まなびプラン、まなび教材、まなび動画といった3つのサービスの総称です。サービスの提供だけでなく、先生がたの事例共有コミュニティやカスタマーサポート、そして支援教育に関するセミナー等のサポートコミュニティも提供しています。

次に、各サービスの仕様についてご説明いたします。まず、まなびプランの仕様について3点お伝えさせていただきます。1点目は、視覚的かつ多面的に児童生徒の実態把握をすることができるアセスメント機能があります。保護者や教員が、対象の児童生徒の情報をアンケート形式で入力することで、教員歴等にかかわらず、同一の観点で児童生徒の実態を把握することができます。そして、アンケートで入力した結果を視覚的に表示することができます。多面的な実態把握をすることができます。2点目は、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成時に、具体的な計画作成を支援する文例提示機能があります。活用事例を2点、紹介いたします。1つ目は、アセスメント結果を活用した合理的配慮の設定をすることができる事例です。アセスメントの結果から、困りの度合いが計画作成画面に表示されるため、実態に応じた文例を検索することができます。合理的配慮の3観点・11項目や、学びの場からも文例を検索することができるため、様々な観点から合理的配慮を検討することができます。2つ目は、スキルレベルに応じた目標の設定をすることができる事例です。児童生徒の発達段階に応じた学期目標検索をすることができるため、個別最適かつ具体的な目標を設定することが可能です。自立活動の6区分・27項目の観点からも文例を検索することができるため、自立活動のポイントを押さえた上で目標を設定することができる事例です。3点目は、複数年度の情報を一元管理でき、引継ぎや情報共有をスムーズに行うことができます。1つの児童生徒ファイルで最大20年間分のデータ保存が可能であるため、ファイル本体を引き継ぐことで、進級進学先でもこれまでのアセスメント結果や作成した計画の内容を確認することができます。また、それぞれの帳票をPDFで出力することが可能となっているため、まなびプランを導入していない進学先

や、関係機関、保護者に対しても円滑に情報共有を行うことができます。特に、進級進学時にこれまでの支援が途切れないように、支援や情報をつないでいくことが可能となっております。

次に、まなび教材のサービスの仕様についてご説明いたします。まなび教材では、スモールステップかつユニバーサルデザインが施された教材を用意しています。イラストや写真が入っている教材や、視覚的な工夫としてカラーやモノクロの教材があり、先生がたの教材作成の時間を短縮することができます。また、困りの観点からも検索できる機能があり、児童生徒の様子や困っている背景を考えながら、教材の選択ができます。教科系の教材や手先の操作につながる工作系の教材、ソーシャルスキルや身辺自立に使える教材もあり、先生がたの要望を聞きながら毎月新しい教材の提供もしております。

最後に、まなび動画の仕様についてご説明いたします。まなび動画では、約160本の動画を用意しており、専門家や大学の教授等にもご登壇いただき、支援教育の基礎的な知識や実践方法を学習することが可能となっております。先生がたが児童生徒に実践することができるような具体的な手立てを学べる動画や、隙間時間でも視聴できる5分から15分ほどの動画、校内での研修に活用いただけるような研修セットの動画も用意しています。また、動画を視聴するだけでは知識の定着が難しいということで、動画に合わせたワークシートも用意しており、個人での自学習から校内での研修まで、様々な場面での利用が可能となっております。次に、箕面市における活用事例について、石澤より説明いたします。

ここからは、箕面市の教育現場において具体的にどのようにLITALICO教育ソフトが活用されているのかをご説明いたします。

箕面市では、LITALICO教育ソフトを、支援教育の核となるPDCAサイクルを循環するためのツールとして、ご活用いただいております。まず始めに、まなびプランでアセスメントを実施します。教員や保護者がアンケートに回答して、「子ども自身がどういったことに困っているか」や、得意なこと・苦手なことを多角的に見える化します。次に、まなびプランでの計画作成です。子どもの様子やアセスメント結果に基づき、文例を参考に最適な個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成します。次に、合理的配慮の検討を行います。計画をもとに、学校でどのような配慮が必要かを検討し、保護者のかたとしっかりと合意形成を行います。最後に、指導と教材選定を行います。作成した計画に紐づく形で、子どもの特性を踏まえ、まなび教材から最適なものを選び、日々の指導に取り入れます。先生がたは、LITALICO教育ソフトが提案する支援や教材を参考にしながら、自身が工夫して作られた自作教材や学校に以前から備わっている教具・既存教材を柔軟に組合わせて、指導されています。LITALICO教育ソフトは、あくまで先生がたのこれまでの経験や専門的な指導をより確かなものにするためのサポート役として、ご活用いただいております。

それでは、実際の導入効果について、アンケート結果をもとに報告いたします。今年11月に実施したアンケート調査では、LITALICO教育ソフト全体について、「今後も継続して利用したい」と回答されたかたは、支援学級等で82%、通常の学級で74%に達しています。具体的にどのような場面で役立っているかについて、特に評価が高いのは、「実態の多角的な把握」です。支援学級等で97%、通常の学級でも78%が有用性を実感されています。ここからは、現場の先生がたの声をご紹介します。小学校の支援学級担任からは「アセスメントは、児童生徒の様子を客観的に把握するうえで有用性を感じた」という声があり、小学校の通常学級担任からは「アセスメントは、どの児童生徒がどのような場面でしんどいと感じるのか、実態把握に役立った」という評価をいただいております。そのほか、「児童生徒の発達凸凹を保護者と同じ視点でみることができた」という家庭連携への効果の声も上がっています。

次に、「教員の業務負担への影響」について報告します。支援学級等の教員からは、「特性の理解と実態の把握」において74%、「計画等の修正」では70%が負担軽減を実感されています。具体的な意見として、小中一貫校の教員からは「これまでの計画を反映・参考にできるため、作業効率が上がっている」という声が上がっています。一方で、「授業準備に関する負担軽減の実感」は、支援学級等では50%弱、通常学級では47%にとどまっています。これについては、2年前にLITALICO教育ソフトの全校導入を開始したこと、通常学級においてはようやく本格的に使い始めるという途上の段階にあることが影響していると考えております。現時点では、アセスメントや計画作成の活用が先行していますが、今後は作成した計画に

基づく教材の活用を推進していくことで、現場の負担の軽減につなげていきたいと考えています。教材活用の推進について、具体的にはこれまでの活用事例を市内の先生がたに周知することで、活用の幅を広げていただきたいと考えています。箕面市内の支援学級等では、すでに国語や算数等の基礎学習に加え、コミュニケーション課題に合わせた教材活用の事例が出ています。通常学級においても、算数などの教科学習だけでなく、自己理解や相手の気持ちを考えたコミュニケーションを促す教材の活用が進み始めています。これら約3万点の教材は現場のニーズに合わせて毎月拡充されています。最新の教材や、効果的な指導例を定期的に先生がたへお届けすることで、授業準備の負担を減らすような流れを作っていきたいと考えています。

続いて、LITALICO 教育ソフトの利用年数による違いについて、分析結果をご報告します。まず、継続利用意向について、支援学級等を担当する教員のうち、今年度初めてソフトを利用したかたの継続意向は、100%でした。この結果から、初めて支援教育に携わる教員にとって、本ソフトが欠かせない存在になっていることが分かります。有用性についても、特に初年度利用の先生がたが、「実態の多角的な把握」「昨年度までの計画の確認」といった場面で、100%という高い有用性を実感されています。例えば、中学校教員からは「支援担当は初めてだったが、文例から選択できることで計画を立てやすく、また目標設定に段階の例があるため、どのように計画を立てて支援していけばよいか、参考になった」という声がありました。また、業務負担の軽減についても、同様に初年度利用の教員の方が効果実感が高い傾向があります。特に、計画等に関する保護者との面談では81%。計画等の修正では82%が負担軽減を実感されています。これは、文例機能や過去のデータの引継ぎによって、一から作成に悩む時間を削減できているためと考えられます。初年度利用の教員が8割前後の高い軽減を実感されているのに対し、複数年利用されている教員は6割から7割程度となっています。この数値の差については、利用年数の長い教員においては、すでにツールの操作に習熟し、導入初期のような目新しさが落ち着いてきたことで、数値が一定のラインに安定してきているのではないかと考えています。複数年利用されている先生がたにとっては、本ツールが特別なものから日常的に使いこなす教育環境の一部として、定着しつつあると考えています。

以上で、LITALICO 教育ソフトに関する箕面市における活用状況や導入効果についての説明を終了いたします。今後も、本ソフトの活用を通して、箕面市の児童生徒一人一人が自分らしく学べる環境づくりに貢献したいと考えています。ご清聴ありがとうございました。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

では、実際に学校現場で活用されている立場から、通級担当の新居教員にご感想等をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

(新居教員)

LITALICO 教育ソフトが導入されたことで、通級が全校設置になり通級担当教員が増えていく中でも、個別の教育支援計画や個別の指導計画を1つのフォーマットで統一することができたので、これは小・中学校の連携の観点も含めて非常に良かったと感じています。

(伊丹委員長)

ありがとうございます。

続きまして、支援学級で LITALICO 教育ソフトを活用されている支援教育コーディネーターの城内委員より、ご感想等をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

(城内委員)

新居教員からもお話がありましたが、小・中学校の連携が非常にスムーズになったことが、大きな成果だと感じています。小学校での見立てを中学校で引き継いで、中学校での支援について考えることができたので、非常に活用させていただきました。また、今年度は通常学級でも非常に活用させていただき、効果を感じる場面が多くありました。

(伊丹委員長)

ありがとうございます。

ご説明いただいたアンケート結果や、実際に利用された先生がたのご意見からも、本ソフトの導入が非常に効果があったということが分かりました。また、合意形成からの合理的配慮においては、やはりアセスメントが非常に大事になりますので、アセスメントを単なる書類を書くことだけで終わらせるのではなく、このように多面的なソフトを活用しながら、実際に生きたものとして活用するという取組ができたことは、市として大きな進歩であり、素晴らしいことだと思います。では、市としての位置づけにつきまして、事務局から何か補足等ございますか。

(事務局：田口室長補佐)

日頃より、本ソフトを先生がたに丁寧に活用いただいていることで、現場において一定の効果が見え始めていると感じております。業務負担の部分については、先生がたからのご意見を踏まえながら、今後も検討を重ねていく必要があると思いますが、小・中学校の連携の部分や9年間で繋いでいくという観点では、非常に大きな成果があったと捉えております。

(伊丹委員長)

ありがとうございます。

今後も、LITALICO 教育ソフトの効果的な活用を継続していただきたいと思います。

続きまして、案件3に移りたいと思います。UNIVA 連携プロジェクトについて、野口委員より、今年度の実践成果について説明をお願いいたします。

案件3 UNIVA 連携プロジェクトについて

(野口委員)

○資料3 (UNIVA 連携プロジェクトについて) に基づいて説明。

(野口委員)

一般社団法人 UNIVA の野口です。よろしくお願いいたします。

前回の箕面市支援教育充実検討委員会でも少しお伝えしたかと思いますが、今年9月に次期学習指導要領の改訂の方向性が決定し、「多様性の包摂」が初めて教育全体の柱として掲げられています。しかし、「主体的・対話的で深い学びを多様な子どもたちを包摂しながら実装する」ことは本当に難しく、文部科学省としてもまだまだ知見が足りないことを認識しており、全国的に課題があると感じています。そんな中、UNIVA では多様な子どもたちがいることを前提としたインクルーシブ教育を実践して、その知見を全国に発信していくことを目的として連携プロジェクトを実践してきました。本プロジェクトにおけるインクルーシブ教育とは、多様な子どもたちが共生するために学校を変革するプロセスであると定義しています。

昨年度より、日本財団等から助成を受けて、「インクルーシブ教育の実践と知見を蓄積していく」かつ「政策を作っていく」というところを、埼玉県戸田市、大阪府箕面市、東京都狛江市とともに行ってきました。それぞれの自治体でモデル校を指定し、該当校では通常学級におけるインクルーシブ教育、まさに主体的・対話的で深い学びを、多様な子どもたちに対して実装してきました。例えば、前回の箕面市支援教育充実検討委員会で萱野小学校より発表いただいたような、社会モデルのプログラムの導入等を実施しました。そして今年度は、この取組を自治体全体で行い、その知見を全体で共有しました。日本財団等の助成が3年間のため、来年度が最終年度という形で計画を立てて、現在進めているところです。

先ほどお伝えしたとおり、昨年度は、箕面市では萱野小学校とともに、学校をよりインクルーシブにしていくという取組と、社会モデルの授業「ふつうアップデート」を実装しました。今年度は、この萱野小学校におけるモデル実践を、継続・発展させていきたいと考えており、先日の研究発表会でも、取組の実践報告をしていただいたところです。

また、この箕面市支援教育充実検討委員会でも、本当に色々な施策を検討していただいておりますが、今年度、人権施策室の皆様と相談し、これらの施策の全体に対する効果検証と、それぞれの学校の現在における課題、そして今後どのような施策をより充実させていけばよいかを

検討することを、フィードバックも含めて行うのはどうかと提案させていただきました。この実践が、本市のインクルーシブ教育の持続可能な仕組みづくりにつながるのではないかと考えています。

現在、市内の全学校において、様々な計画に基づく研修や、LITALICO 教育ソフトの活用、リーディングチームや通級の整備、支援教育の充実等を進めているかと思えます。また、各学校からお話を聞くなかで、それぞれが学校独自の様々な取組を実施していることが分かりました。萱野小学校でも、UNIVA のモデル校として色々な実践をさせていただいて、さらに検証加配校においては、PBS (Positive Behavior Support : ポジティブな行動支援) の取組が実践されていました。これらの取組について、効果検証をどのように進めていくかということで、今回、SDQ (Strength Difficulties Questionnaire : 子どもの強さと困難さアンケート) を使うことを提案させていただきました。このアンケート結果については、現在、分析を進めているところです。この SDQ という質問票は、子どもの強さと困難さアンケートということで、世界的にもかなり多くの国で使用されている質問票です。子どもたちの状態像として「向社会的行動 (他人を援助したり共有したりする行動の程度)」「多動・不注意 (注意持続の難しさ。じっとしていることの難しさの程度)」「情緒不安定 (不安や落ち込み、不定愁訴等を示す行動の程度)」「問題行動 (喧嘩、いじめ、嘘、癩癩などの不適切な行動の程度)」「友人関係問題 (友人関係において適切な関係が築けている程度)」「困難性総合 (総合的な困難さ)」の5つの側面について、データを測定します。今回、アンケートへの参加を希望された学校は、小学校7校・中学校4校で計11校でした。

来年度の取組について、SDQ については、経年変化を追っていくことで、より現在行っている施策の効果や不足している課題が学校ごとにも明確になりますし、市全体としても明確になっていくので、できれば経年変化という形で来年度も実施できればと思っています。また、今回の調査で欠けていた視点として、各学校において色々な独自の施策を実施されているかと思いますが、各学校でどのような施策が実施されていて、その施策が SDQ の結果にどう関係しているのかという点を考慮できていませんでした。上記の要素をかけ合わせてデータを分析すると、各学校の独自の取組のうち、どの取組が子どもの困難さを軽減することに有効で、今後必要な取組がどのようなものであるか等、より具体的な施策を検討するにあたって、効果的な結果が得られるのではないかと感じています。この「学校ごとのインクルーシブ教育に関わる取組内容 (インクルーシブ教育指標)」に係る調査票については、現在 UNIVA で開発を進めているところですので、来年度はインクルーシブ教育指標に係る調査票と SDQ をかけ合わせて分析を行い、各学校で実施している施策を統一的に整理できればと思っています。以上になります。ありがとうございました。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

それでは、実際に現場で関わっていただいている先生がたから、コメントをいただきたいと思えます。支援教育支援員の末廣委員より、何かご意見・ご質問等ございますでしょうか。

(末廣委員)

支援教育介助員から支援教育支援員に移行したことで、校内での役割や支援に携わる対象児童生徒が広がり、学校全体の支援体制が強化されて底上げされているので、仕組みが変わってきたこと自体はとても良かったと思います。仕組みが変わったことで、支援体制の見直しや、LITALICO 教育ソフトの導入、UNIVA との連携等が実践されて、先生がたの支援に対する負担や児童生徒の実態把握に対して、専門的な観点からの対応がしやすくなっているのではないかと思います。また、初めて支援教育担当者になった教員や新人の教員等にとっても、自信を持って支援の対応に当たることができる仕組みづくりが整ってきていると感じています。

(伊丹委員長)

ありがとうございます。

続きまして、通常学級の児童生徒を支援されている通級担当の文教員からもご感想等をいただきたいと思えます。

(文教員)

先ほどの野口委員のお話にもありましたが、各学校がそれぞれ独自に行っている施策等は、本当に目に見えない形で色々と実施されているので、それらが整理されて、どの取組が有効であったかが見えてくると、学校内でもそのような視点を持って教材研究等ができるのでありがたいと感じました。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

続きまして、管理職の立場から、俵積田委員よりご意見等をいただきたいと思います。

(俵積田委員)

第二中学校では、支援教育研修で支援学校の先生からお話しただいており、このつながりによって、支援学校の先生と非常に接しやすくなったと感じています。このような連携やつながりがあることは、非常に大きな意義があると思いますし、校内の先生がたにとっても助言やアドバイスをいただけることは非常に大きいことだと思っています。

また、LITALICO 教育ソフトについて、個別の教育支援計画等の作成支援ではよく活用させていただいておりますが、まなび教材等についてはまだ十分な活用ができていないと感じています。本校の課題として、人事異動ルールにおける教職員の年限により、支援担当の教職員が一気に異動してしまうという現状があるので、LITALICO 教育ソフト等の活用をさらに進めていき、教職員の負担軽減の一助となればと思っています。

学校独自の取組については、本校は学校全体で「非認知能力」について力を入れており、5年間継続して取り組んでいます。教職員が意識を持ち、自ら気づいて行動できるように、人権教育の取組は学校全体で力を入れて実践しています。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

先ほど野口委員がおっしゃったように、経年変化を追ってアンケート結果を見ていくためには、さらに実践を積んでいくことが、成果を明らかにすることにつながるのではないかと思います。また、各学校それぞれの施策を見える化していったら、インクルーシブ教育指標に係る調査票と SDQ をかけ合わせた分析結果がどのようなものになるか、楽しみにしておりますので、明らかになりましたらご教授いただきたいと思います。それが今後の鍵になっていくと感じておりますので、期待を寄せたいと思います。

続きまして、案件4に移りたいと思います。まずは、とどろみの森学園より実践報告をお願いいたします。なお、動画での報告と伺っております。よろしくお願いいたします。

案件4 学校における実践例について

(とどろみの森学園 動画報告)

とどろみの森学園での PBS に関する取組について、報告いたします。

まず、学校全体の今年度の取組「もっとステキにプロジェクト」について説明します。2024年に引き続き、一人ひとりが今よりももっとすてきに、学校生活を過ごすことを目指したプロジェクトになります。そのための道しるべとして、チャートを活用しました。昨年度は、「授業中」「掃除」「給食」「休み時間」「行事」等、項目がたくさんあったため、チャート作成に時間がかかることや、内容が抽象的で分かりにくいという課題がありました。そこで、今年度はチャートの項目を減らし、「あたりまえ」「ステキ」「もっとステキ」の3項目にしました。また、内容をわかりやすくするために、児童生徒会で選んだ候補から選ぶ形にしました。これにより、作成の負担を減らし取り組みやすくしました。チャートには「挨拶」「感謝を伝える」等、具体的な行動を考えました。児童生徒会では、その他にも「授業準備をする」「落ちたものを拾う」等、60以上もの候補を考えてくれました。その中から選んでも良いですし、学級ごとに追加してもよいという形にしました。クラスによっては、「廊下は走らな

い」を言い換えて「廊下を歩く」等の言葉に言い換えていました。児童生徒自身が、考える・決めることを大切にすることで、主体的な取組をとおして協力や思いやりを育てることをねらいとしました。本校では、1年生から9年生までがおり、発達段階に違いがあるため、同じチャートを活用することは困難だと考え、各クラスで挙げた意見をもとに学年で1つのチャートを作成したり、項目を減らすなど柔軟に対応できるようにしました。チャートを作って終わりではなく、日々の取組と振り返りを大切にすることで、朝礼で今日頑張ることを確認し、終礼で振り返るようにしています。

例えば、4年生が作成したチャートでは、学年で1つのものを作成しました。教室に掲示するだけでなく、学年の子どもたちが毎日見るところである水道に貼っています。すてきな場面があれば、先生に報告するとシールを貼ってもらえるようにすることで、できたことが可視化され、意欲が高まることをねらいとしています。

5年生は、学年のなかでなかなか宿題の提出が揃わないという課題があった一方で、11月に行われた市内の中学校・小中一貫校で行われたベル着グランプリでは、授業時間を意識して準備等に取り組む姿が見られました。これをうけて、宿題を提出したらシールを貼る、授業開始時に着席・授業準備ができていたらシールを貼るというような取組を実施しました。ベル着では別室で授業を受ける児童生徒を、宿題提出では個人に応じた課題等を出している児童生徒のことも考えながら、今回の取組で児童生徒全員が少しでも良い方向に進めるように、クラスごとに個別に配慮しました。取組が進むにつれて、子どもたちのシールの数が増えていく様子がみられ、たまったシールを担任以外の先生に見せて、頑張っているということアピールする児童生徒もいました。児童生徒の中からは、頑張っただけで宿題をしたという発言もありました。子どもたちができていることを可視化することで、できていないことが分かりやすくなり、意欲的に取り組むことができる部分もありました。

8年生の取組は、授業集中度とベル着達成度についてです。授業集中度は、各授業時間を3点満点として、授業後に学級代表が教科担任に聞きに行き、点数を教えてください。6時間の日であれば、1日18点満点のうち、何%になったかを記入します。ベル着達成度は、授業開始時に学級代表が確認し、何%になったかを記入します。どちらの数値も折れ線グラフで視覚的に見やすい形で学年の廊下に貼ったので、「今日は頑張ろう」など児童生徒同士で声かけをする場面も見られました。教員は、どの曜日や時間があまりできていないか傾向が分かるため、声かけなどの手だてをとることもできました。また、児童生徒の生活の様子からよかったところの写真を撮り、担任のメッセージとともにお手本となる行動を掲示しているクラスもありました。例えば、靴箱に綺麗に靴が入っている写真を良いお手本として教室に掲示して、綺麗に靴を入れるように促したり、ランドセルを入れる棚の上に見本となる写真を掲示し、実際に写真のように綺麗に棚に入れるよう促しました。

最後に、全体朝礼での校長先生のお話を紹介します。校門で挨拶をしているときのいろいろな挨拶についてのお話で、「軽く会釈をしてくれる挨拶」「小さい声でしてくれる挨拶」「元気にしてくれる挨拶」「自分から大きな声で笑顔でしてくれる神挨拶」等、駄目な例を示すということではなく、この挨拶でも嬉しいけどこんな挨拶だともっと嬉しいという肯定的な言い方で話をさせていただきました。その結果、全体朝礼の次の日には神挨拶が増えていました。

取組の成果として、学校全体で「もっとステキにプロジェクト」に取り組み、9学年が同じ方向を向いてよりよい学校生活を送れるように意識することができました。また、チャートの項目を減らし、児童生徒会で内容を考えたことで、子どもたちに主体性が生まれました。そして教員は、例示があることで事前の準備の負担が減り、業務軽減につながりました。文字や写真でよいお手本を示すことで、何をしたらよいか分かりやすく、子どもたち同士で声を掛け合う姿が見られました。

課題として、記録を可視化することにより子どもたちの意欲は上がりましたが、必要な物品シールやカラー印刷等の予算的な確保が必要となります。本校は9学年あり、他学年の取組が見えにくい状況がありますし、個人でもPBSに取り組んでいる方もいるので、職員間で取組を共有できる時間や場を設定できればよかったということが挙げられます。このような成果や課題を踏まえて、来年度の方向性を校内で考えていきたいと思えます。以上で、とどろみの森学園でのPBSに関する取組についての報告を終わります。ありがとうございました。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。素晴らしい実践だと感じました。

では、この件に関しましては当該校の校長先生がいらっしゃいますので、学校管理職の立場から、金城委員よりご意見をいただきたいと思います。

(金城委員)

報告担当者がいわゆる検証加配校としての加配教員なのですが、このような教員が一人いることによって、取組の進捗や成果が大きく変わると感じています。PBSについては、以前から本校では重要だと考えて進めておりましたが、児童生徒が主導の「もっとステキにプロジェクト」の集約や、各学年の取組に対するアドバイス等、当該教員が色々な調整を進めてくれて、円滑に実施することができました。私も、実際に挨拶等でPBSを実践してみましたが、児童生徒に肯定的な声かけをすることで、着実に成果が出て子どもたちの動きに変化が見られるのがすごくよかったと思います。ただ、これをどのように子どもたちの継続的な行動につなげていくのかという部分は、まだまだ課題だと感じておりますが、実践してみて多少の成果はあったと思います。

(伊丹委員長)

ありがとうございます。

ぜひ取組を続けていただき、さらなる成果を出していただけたらと思います。

続きまして、保護者会の立場から、つばさの会様よりご感想等をいただきたいと思います。

(つばさの会代表)

先ほどのお話で一番印象的に思ったのは、全体朝礼での校長先生からのお話のなかで、朝、校門前で校長先生が挨拶される姿を絵に描いて表現し、子どもたちに説明したというのがすごく分かりやすいと感じました。先生がたも子どもたちも、お互いがもっと気持ちよく笑顔で接するうえで、絵に表現して子どもたちに分かりやすく説明するということはとても良い取組だと感じました。

(伊丹委員長)

貴重な感想をいただきまして、ありがとうございます。

このようなポジティブな取組を校内で実施して、子どもたちが学校に居場所を見つけて「ここが僕の居場所なんだ」「学校に行って安心できるんだ」という気持ちになっていれば、本当に嬉しいことだと感じます。素晴らしい取組の報告をありがとうございました。

続きまして、中小学校より実践報告をお願いいたします。中小学校支援教育コーディネーターの楠橋委員より、ご報告いただきます。よろしく願いいたします。

(楠橋委員)

それでは、今年度の中小学校の実践を報告いたします。

今年度取り組んだPBSについてですが、PBSとは児童生徒の行動を問題行動として捉えるのではなく、なぜその行動が起きているのかに着目し、望ましい行動が生じやすい環境や関わりを整えていく考え方です。ポジティブな行動を、ポジティブなアプローチで伸ばしていくのが特徴です。PBSを全校で取り組んでいけるように、本校では様々な研修や会議を実施しました。今年度、本校では教職員の人事異動が非常に多く、PBSを初めて知る教職員も多かったので、校内で数回に分けて研修を行ってきました。生活指導担当が月1回、15分程度行う研修の中で、6月、7月、11月でPBSに関する研修を実施し、何度かに分けて話をする中で、教職員の中に意識づけができたのではないかと思います。7月の研修では、望ましい行動を引き出す工夫としてどのようなことができるのか、児童生徒の様子を思い浮かべて考えました。全体研修では、夏期休業中の研修にて実際のPBSの具体例を紹介したり、本校での取組を紹介しました。そして、3学期のまとめの研修では、今年度のPBSの取組を振り返って教職員それぞれがチェックリストを記入し、優先的に取り組みたい項目を選んで、具体的にどんなことを

したいかを考えました。その後、グループに分かれて本校で児童生徒に期待する姿や、見つけてほしいこと等を話し合いました。実際に出た意見としては「挨拶ができる」「困ったときに助けを求められる」「人の話を聞くことができる」等がありました。

次に、全校の取組を紹介いたします。今年度は、みんなで学校を綺麗にしようということで「ピカピカチャレンジ（ピカチャレ）」という取組を実施しました。本取組のねらいは、児童生徒のできている行動を認め、主体的に掃除に取組む意欲を高めることです。まず、トイレや廊下等、共有スペースを掃除する様子を教職員が共通の視点で見、ポジティブな指導を行いました。共通の視点とは、「ゴミがおちていない」「すみずみまできれいにしている」等で、掃除時間中に教職員が見回って、項目をクリアしている場合はシールを貼っていきました。子どもたちは、予想以上に各場所で頑張ろうという姿を見せ、一生懸命掃除を行っていました。1回目のピカチャレの後、教職員にアンケートをとり、児童集会でも子どもたちの頑張りを紹介し、ピカチャレマスターとしてシートを廊下に掲示しました。その後「またやって欲しい」という子どもたちの声もあり、2回目のピカチャレを3学期に取り組みました。その時期には市長が来校されたので、市長にもシールを貼ってもらい、子どもたちは嬉しそうな様子を見せていました。

次に、教職員へのアンケートより、子どもたちの具体的な姿についての記載を紹介します。「シールによって視覚的に頑張りが見えることがとてもよかった」「ピカチャレの取組が終わってからも、掃除を頑張ろうとする姿が継続して見られた」「校区の教職員が本校に集まり研究会を行った際、他校の先生がたにシールを貼ってもらえたことをとてもうれしく感じている様子が見られた」等の意見がありました。また、教職員向けの取組としては、PBSを意識できるように、教職員のよい関わりを「見える化」した掲示を職員室に貼り、PBSができたときや、他の教職員のよい関わりに気づいたときに、シールを貼っていく取組を行っています。3学期の終わりには、この掲示がシールでいっぱいになっていけば、嬉しく思います。

次に、各クラスの取組についていくつか紹介します。1つ目は、子どもを認めるポジティブな言葉を教室に掲示する取組です。クラスで言われたらうれしい言葉を集めて掲示したり、「ありがたみカード」という日頃感じた「ありがとう」の気持ちを友達に書いたカードを掲示しています。2つ目は、学びの参考となるノートを掲示する取組です。ノートのとり方が分からない子どもにとって、どんなふうに行けばよいかの参考になり、また掲示された人にとっては、自信につながります。3つ目は、1年生が6年生や2年生と一緒に交流した後に、彼らに送った手紙です。これも、手紙をもらった子どもたちの自己肯定感の向上につながるのではないかと感じています。

次に、各クラスで行われている合理的配慮の取組について紹介します。1つ目は、黒板掲示用の時間割に使うカードへの工夫です。年度始めに全クラスに配って、毎日、その日の予定を教室の前後に掲示してスケジュールを視覚化しています。クラスによっては、1週間分の予定を後ろの黒板に掲示しているところもあります。2つ目は、相手や場面に応じた聞き方・声の大きさの目安を示したカードの掲示です。誰にとっても、安心してやり取りしやすい環境を整えることをねらいとしています。3つ目は、そうじ当番表への工夫です。役割分担や、掃除の手順・方法を分かりやすく説明して、見通しをもって安心して取り組めるようにすることをねらいとしています。これらの取組は、児童生徒一人ひとりの特性や困り感に配慮し、誰にとってもわかりやすく、安心して学べる環境を整えることを目的としています。掲示物や関わり方への工夫をおして、合理的配慮の視点に基づいた学校づくりを進めています。

続いて、5年生の取組「称賛キャンペーン」について紹介します。5年生では、11月下旬から12月にかけて、指示があったら、すぐに教科書やノートの準備ができるようにしようという取組を行いました。この期間は、私が授業の様子を見に行くことを児童生徒に告げて、授業の終わりに何%の人ができていたかを、毎回発表しました。取組が後半になるにつれてできる割合が増えてきて、最後は100%を達成しました。子どもたちは、100%に届かないときは「次は100%にしよう」という発言があったり、達成したときは「やった」という声や拍手も上がったりしました。担任には、授業を見に行く際は、毎回称賛回数を数える旨を伝えて、どのような言葉がけが称賛になるか、実際にどのような称賛がされていたか、その時の児童生徒の反応等を伝えて、回数を数えていきました。この取組をおして、意識的に称賛することで児童生徒が発言しやすい雰囲気生まれたこと、担任が意識して称賛の言葉を使う機会

が増えたこと、児童生徒が嬉しそうな反応を示す様子が見られたこと等が、成果として挙げられると考えています。

次に、五中校区で連携して行った取組について紹介します。今年度は、五中校区での取組を考えたときに、児童会・生徒会の小中連携会議で、PBSを中心に据えると決定しました。そして、キャッチコピーを「ポジティブ行動！笑顔100倍ゲットだぜ！～みんなの笑顔守り隊～」と決めました。まず、1つ目の取組として、保護者のかたにアンケートを実施しました。子どもたちのよい行動や望ましい姿についての声を集め、学校・家庭・地域が共通の視点で子どもを支えることにつながるために実施しました。このアンケート結果を、五中校区の各校で懇談の際に掲示しました。その掲示を見て寄せられた保護者のかたからの感想を紹介します。「あたたかい言葉をかけられることで、あたたかい気持ちになり、空気そのものが優しくなるように感じました」「子どもも自分自身も大切にす、素敵な言葉に包まれた世界が見えました」等の意見がありました。2つ目の取組は、生徒会・児童会の取組です。生徒会・児童会連携会議でも、「五中校区でのすてきな挨拶とは何か」をテーマに、事前に児童生徒にアンケートを実施し、その結果をもとに意見を出し合いました。「元気に」「笑顔で」「気軽に」等のキーワードが挙がりましたので、これらをもとに各校で挨拶の動画を作成する予定です。このように、本校だけでなく五中校区全体で、子どもたちも一緒にPBSの取組について考えていきました。

続きまして、支援コーディネーターの学校での役割について紹介します。支援コーディネーターとしては、主に「子ども支援」「保護者支援」「教職員間の情報共有」「各関連機関との連携」の4つの役割があります。いずれにおいても、情報共有を密にして、教職員全員で支援にあたっていけるように調整・連絡をしていくことが役割だと思っています。

最後に、今年度の取組のまとめについて、PBSの取組による成果としては、2年間、様々な場面でPBSを意識して取り組む機会が増えたことが挙げられます。これまで行ってきた実践についてもPBSの取組であったことを再認識し、その効果について振り返ることができました。課題としては、注意が必要な場面はありますが、注意にとどまらず望ましい行動を教えたり、ともに考えたりする関わりを大切にしていけることが挙げられます。望ましい行動がみられた際に、すぐにポジティブ・フィードバックを行うことを校内に浸透させていく必要があると感じています。また、支援学級在籍児童生徒にとっての有効性について、PBSの取組は彼らにとってできることが増え、それを認められる機会が広がることで、自信につながっていくと考えられます。実際に、ピカチャレでは一生懸命掃除に取り組み、褒められて嬉しそうにしている児童生徒の姿がよく見られました。今後については、1月の研修で出された意見をもとに、「こんな姿になってほしい」という子どもの姿を整理し取りまとめ、来年度の学校全体の目標として提示したいと思っています。以上になります。ありがとうございました。

(伊丹委員長)

丁寧の説明いただきまして、ありがとうございました。どの取組も、なかなか楽しそうな面白い取組だと感じました。

それでは、この件に関しまして、保護者代表の立場からゆうやけの会様より、ご感想、ご意見等をいただきたいと思ひます。

(ゆうやけの会代表者)

お話を聞いて、一緒に先生が掃除をしてくれたり、視覚的に分かりやすい工夫が行われていたり、色々な取組を先生がたが一生懸命考えてやってくださっていることが分かって、本当にありがたいと感じました。私も、家で子どもたちに「やりなさい」と言ってもなかなか聞いてくれないことがあるので、大人が子どもと一緒に取り組むことの大事さや、大人が子どもにお手本を見せてあげることの必要さを改めて感じて、自分もさらに実践しなければならないと実感しました。また、長く継続して取り組むことで十分な効果が得られると思うので、1年生から6年生まで取り組み続けて、中学校でも共有していくことが大事だと思いました。

(伊丹委員長)

ありがとうございます。

継続的な実施という、PBSにおける非常に大事な視点をおっしゃっていただきました。

ありがとうございます。

続いて、小田委員より、校内体制を整えるという視点からご意見をいただければと思います。よろしく願いいたします。

(小田委員)

PBSは「子どもは基本的に褒めて伸びる」ということを前提にしている、これは非常に大事な視点で素晴らしい一つのモデルになるのではないかと考えています。一方で、学生や年齢が若い先生がたを見ていると、少し注意されたり指摘されると、すぐに落ち込んだりする様子がみられるので、叱られ慣れしていないというところが、色々なところに影響しているようにも感じます。それらの兼ね合いをどのようにしていくのかという点が、今後の課題だと思っています。ですが、基本的にはPBSを前提にして、一つの学校文化として定着させていくことが、学校のなかで子どもたちの居場所を作っていくうえで、非常に重要なことだと思いますので、これを一つの大きな柱にしていくことが大事なことだと思います。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

中小学校の実践報告のなかで、五中校区で取組内容を互いに共有していることや、さらに学校・地域・家庭が結びついているというお話がありましたが、これは特に素晴らしい取組だと感じました。ぜひ、これらを継続していただくという視点で、今後も取り組んでいただけたら嬉しく思います。ありがとうございました。

それでは、案件5に移りたいと思います。今年度のまとめと次年度に向けて、事務局より説明をお願いいたします。

案件5 その他

(事務局：田口室長補佐)

それでは、今年度の振り返りと要点等について説明させていただきます。

今年度の前進として、以下の3点を挙げさせていただきます。

まず1点目は、支援が「見える形」になってきたことです。子どもの得意なことや困りごとを丁寧に整理して、教職員間での共有がしやすくなっているのではないかと感じております。担任のみならず、学校全体で支える体制が整いつつあると感じました。保護者のかたとも、共通の資料をもとに協議しやすくなっているかと思っております。

2点目は、学校全体の雰囲気が少しずつ変化してきていることです。違いを前提に考えることや、良い行動を見つけて認めること、分かりやすい環境を整えること等の取組が広がり、伊丹委員長や小田委員からもいつも言っていていただいております「『困った子』ではなく『どう支えるか』」を軸に考えるような学校に近づいていっていると感じています。

3点目は、支援を支える仕組みが整ってきたということです。通級指導教室の充実や、校内でのコーディネーター等の話し合いの仕組みづくりが進んできて、特定の教職員に負担が集中しない体制が前進してきているのではないかと考えています。一方で、「制度等が分かりにくい」「役割が見えにくい」という声もいただいておりますので、来年度は説明の見える化をより進めるとともに、安心して相談できる環境づくり等も推進していきたいと考えております。

支援教育は特別な取組ではなく、すべての児童生徒が安心して学べる学校づくりそのものだと感じております。来年度は、今年度の成果を土台に、学校の「当たり前」として定着させていく一年にできればと思っております。以上、事務局からのまとめになります。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

最後に、校長先生のお三方より、一言ずつコメントをお願いしたいと思います。

(辻野委員)

本日は、ありがとうございました。

実際に、各校で取り組まれている事例をそれぞれの学校から聞いて、学校全体の取組として PBS のような良い方向で子どもたちを褒めて認めていく取組を進めることは、非常に重要な視点だと思いましたし、豊川南小学校も検証加配校としての加配教員がおりますが、このような取組を進める際には取り組みやすさを感じています。また、児童生徒の指導について、ルールを守らせるための指導にはとても大きなエネルギーを要しますが、子どもたちを褒めていくという指導はとても取り組みやすいですし、子どもたちも非常にのってくるなというのを、実体験として強く感じています。

また、中小学校の実践報告を聞いて、キャンペーンやキャッチフレーズを作ったという事例がありましたが、これは非常に子どもたちがのりやすい方法だと思いました。ぜひ、四中校区でも参考にして、小中連携として PBS に実際に取り組んでいきたいと思いました。本日は、色々な実際の取組を示していただけて、ますます箕面市が良い方向に進んでいくように感じ、とても明るい気持ちになりました。ありがとうございました。

(俵積田委員)

一年間、ありがとうございました。

第二中学校は、隣が五中校区なので、第五中学校と中小学校の取組は把握しておりますが、二中校区でも同じように校区内で情報交換をしながら取組を広げております。本校は、3つの小学校から進学がありますので、どの小学校でも同じように取組を進めていきたいですし、五中校区で実践されているものも参考にしながら、取組を進めるようにしています。本校は、3つの小学校から進学がありますが、市内では一番小規模校になっており、教職員数が多くないので、当然ながら支援教育の中身等を全員が理解して動かないといけないという現状があります。例えば、支援の入り込み等では色々な先生に入ってもらっていたり、支援体制の情報共有等は、どの先生がたも非常に理解を示してくれています。

学校全体としては、非認知能力の向上の取組を進めておりますので、教室の中で子どもたちへの褒め方や、気づいたところをしっかりと支えていくこと、子どもたちがよりよい動きや気づきができるということを大事にしていきたいですし、これを継続して、さらに支援と絡めながら、校内に広めていきたいと思っています。

(金城委員)

本日は、ありがとうございました。

PBS の観点から言いますと、箕面市支援教育充実検討委員会の成果では、案件1のアンケート結果にも現れていましたが、本当に素晴らしい成果が出ていると思います。箕面市支援教育方針を丁寧に作り上げてきた結果が、そしてその方針を学校現場がしっかり生かしてきた結果が、このアンケート結果に出ていると思いますので、本当に箕面市の取組としてうまく進んでいるのではないかと思います。ありがとうございました。

(伊丹委員長)

端的にまとめていただきまして、ありがとうございます。

先ほど、事務局の田口室長補佐からもお話がありました3つの大きな前進「支援の視覚化」「学校の雰囲気向上」「支援を支える仕組の整備」については、各校の実践報告からもその成果が明らかになりました。その支援体制を支えていただく LITALICO 教育ソフトの活用や、UNIVA との連携等の仕組が非常に整ってきたことで、支援教育を特別なものにならないような支援体制が進んできていると感じました。「ともに学び、ともに育つ」、誰も仲間外れにならない、困った子から困っている子へと視点を変えて、すべての子どもが幸せになれるような、そんな箕面市の教育を作り上げていただけたらありがたいなと感じました。その気持ちを、来年度にもつないでいきたいと、今、心新たに感じたところです。本日は本当にありがとうございました。引き続き、ご理解とご協力を賜りたいと思います。最後に、事務局より事務連絡をお願いいたします。

(事務局：田口室長補佐)

次年度も、年間3回の会議の開催を予定しております。日程等は、また次年度、改めてご案内できればと思っております。年度ごとに委員が交代される場合につきましては、後日事務局より確認をさせていただきたいと思っております。以上でございます。

(伊丹委員長)

ありがとうございました。

本日は沢山のご意見をいただき、また素晴らしい実践報告をお伺いし、非常に私も楽しい時間を過ごさせていただきました。箕面市の明るい未来も感じました。本日は誠にありがとうございました。

3. 閉会

(伊丹委員長)

それでは、以上をもちまして、本日の案件は全て終わりましたので、令和7年度第3回箕面市支援教育充実検討委員会を閉会いたします。皆様、ありがとうございました。